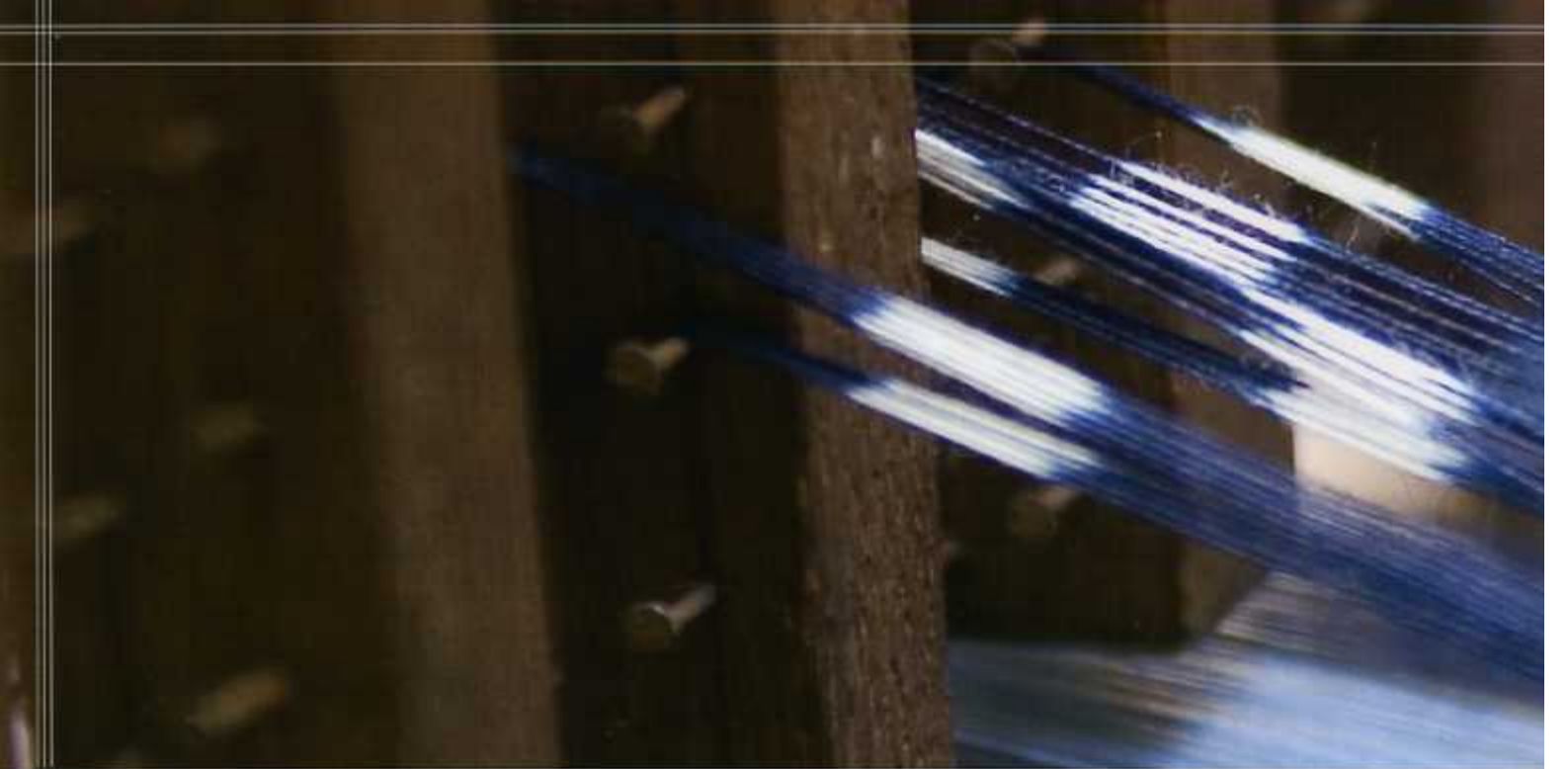


2009

Overview of current municipal affairs, Kurume city

久留米市勢要覧





久留米市長 江藤 守國

Mayor of Kurume city / Morikuni Eto

「個性・魅力・活力ある 中核都市・くるめ」の実現に向けて

九州一の大河「筑後川」と緑豊かな耳納連山に育まれた久留米市。肥沃な大地と温暖な気候に恵まれた、自然豊かな美しい都市です。交通の要衝に位置し古くから筑後地方の中心として栄えてきました。

久留米市は明治22年4月1日に全国30市とともに日本で初めて市制を施行しました。当時は篠山城跡周辺を中心に人口2万4千人の小さな市からのスタートでした。その後、紺の街やゴムの街として発展し、現在では人口が30万人を超え、九州では県庁所在地以外で唯一の中核市へと成長しました。平成21年、市制施行120周年の記念すべき年を迎えました。

地方分権が進展するなか、これからの都市づくりは、市民と行政が役割と責任を自覚し、協働の担い手として主体的に役割を果たしていくことが求められています。先人たちが築きあげてきた伝統、文化、産業、人材などの地域資源を最大限に活用し、基本理念である「水と緑の人間都市」の実現を念頭に、「個性・魅力・活力ある中核都市」「21世紀の学術研究都市」「子ども未来創造都市・市民健康都市」の3つのめざす都市像に向かって、全力で市政運営に取り組んでまいります。一層のお力添えをお願いいたします。



human



nature



art



culture



history



future



life



tradition

目次

特集 1	2011年・春 九州新幹線鹿児島ルート全線開業	02
------	----------------------------	----

特集 2	最先端の医療機能を活かした 医療安心のまちを目指して	04
------	-------------------------------	----

久留米市120年のあゆみ	06
--------------	----

芸術	08
----	----

久留米を創った人物伝	10
------------	----

歴史	11
----	----

伝統工芸	12
------	----

グルメ	13
-----	----

農業	14
----	----

久留米市みどころマップ	16
-------------	----

くらし	18
-----	----

いのち	19
-----	----

学び	20
----	----

未来	21
----	----

行政・議会	23
-------	----

久留米市の歌	24
--------	----

【特集 1】
九州新幹線

Shinkansen

2011年・春、九州新幹線 久留米駅開業

30万都市久留米が 九州の新たな玄関口へ。

2011年・春、いよいよ九州新幹線鹿児島ルートが全線開業します。
新幹線駅として、スタイリッシュに生まれ変わる「JR久留米駅」

そして、福岡県南部の玄関口としての役割を担う久留米市
福岡、九州、そしてアジアを代表する都市を目指して多様な魅力が詰まった街づくりを着々と進めています。



暮らす人にも、訪れる人にも 魅力ある街久留米を目指して。

2011年・春に九州新幹線鹿児島ルート[※]の全線開業(博多～鹿児島中央間)により、格段にアクセスが向上する久留米市。山陽新幹線の相互乗り入れも実現し、九州の中心駅であるJR博多駅へのアクセスはもちろん、関西圏への交通の便も良くなるが見込まれます。このビッグプロジェクトを契機に久留米市は観光やビジネスなど広域的な人の往来が活発になることが期待されます。そこで、久留米市では九州新幹線のメリットを最大限に活かし、30万都市の玄関口にふさわしい都市拠点づくりを推進しています。駅前広場や周辺地域の再開発といったハード面の整備をはじめ、久留米の自然や伝統文化、食を活かした散策ツアーなど「ほとめき(おもてなし)のまちづくり」にも積極的に取り組んでいます。



「アートの街・久留米」を感じさせる、 新・JR久留米駅

九州新幹線鹿児島ルート[※]の全線開業にともない、JR久留米駅も新たに生まれ変わります。古き良き芸術文化を数多く残す久留米にふさわしく、赤レンガ調を基調としたギャラリーのような空間を創造。また、どなたにも利用しやすい駅を目指し、ユニバーサルデザインの考え方を積極的に反映させています。



[特集 2]

高度・高次医療

Medical

九州の高度・高次医療拠点

最先端の医療機能を活かした 医療安心のまちを目指して。

九州で唯一の高度救命救急センターを持つ久留米大学病院や、乳幼児医療をはじめ高度な医療や検査機能を有する病院が集積している、「医療安心のまち」久留米。がんワクチンの研究で先端医療開発特区の指定を受けた久留米大学を中心に国内最先端の医療研究も行われています。医療分野におけるバイオ技術を核とした大学と企業との共同研究などを通して、次世代の成長産業であるバイオ関連企業や研究機関の集積も進んでいます。この恵まれた環境を活かし、高度な医療サービスと研究開発機能を融合し、充実・強化を図ることにより、「久留米の魅力・ブランド」として「高度・高次医療都市」を確立します。

医療機関の集積と医療機能の充実した “広域医療拠点都市”

久留米市には、35の病院と300を超える診療所など多くの医療機関があります。さらに脳卒中や頭部外傷など、二次救急で対応できない重篤な患者に対し、高度な医療技術を提供する救命救急センター（久留米大学病院の高度救命救急センターではドクター・ヘリも運行）やハイリスクの妊婦や新生児に対応する総合周産期母子医療センターなどの広域的な救急医療体制が充実しています。また、医療機能面からも、高度先端医療を実施する特定機能病院や質の高いがん医療を提供するがん診療連携拠点病院といった承認・指定を受けた病院などがあり、生活圏を超えた九州北部の広域医療拠点都市となっています。



久留米大学病院
高度救命救急センター長
坂本照夫 先生

多くの方々の理解や協力があって、 ドクターヘリで救える命がある。

ドクターヘリをわかりやすく言うと「ヘリコプターを使った医師の出前」。出動要請を受けてから5分以内に離陸し、平均15分で現場に到着して医療を開始します。1分1秒を争う現場では、このドクターヘリの機動性が救命率に大きく貢献しています。また、交通網が整っていない山間部やへき地には、ヘリコプターを使った空からのアプローチが役に立っています。しかし、こうした事業も私たちだけではできないこと。地域の方たちの理解や関係機関の協力があってこそ、なし得る事業であり、救える命だと思えます。

全国的に小児科医の不足が問題となっている中、久留米市では2006年から地域の小児科開業医や市内の医療機関の協力のもと、久留米広域小児救急センター事業を開設しました。地域の小児科医が毎日交代で診療することで、夜間(19時～23時)でも安心して受診できる体制を整えています。



最先端の医療研究が進む。

バイオ産業の集積を目指す「福岡バイオハレープロジェクト」。久留米大学を中心に進めてきたがんワクチンの研究が「先端医療開発特区(スーパー特区)」に指定され、国内初のがんワクチン外来の設置が予定されています。また、高度な技術を持った医療機関が集積する優位性を活かし、医薬品・医療機器や農産物を活用した機能性食品の開発などのメディカル・バイオ産業の集積を推進するなど高度医療都市づくりを目指しています。





久留米市120年

久留米市、誕生!九州初の鉄道も開通

明治22年(1889)4月1日、「市町村制」の施行により久留米市が誕生しました。当時、九州で市制施行したのは福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島島の6市。当時の人口は24,750人、戸数は4,262戸でした。この時、初代市長に選ばれたのが、内藤新吾です。約5年間で、市長として教育、経済の発展に尽力しました。また、この年の12月、九州で初めての鉄道が久留米～博多間(現・JR)で開通しました。



初代久留米市長
内藤新吾



旧久留米市庁(旧藩時代の御使舎)

「久留米絨」と「たび」、 2大産業が戦前の久留米を支える。

明治後期から大正、戦前にかけて、久留米市の経済は一気に活気づきます。それを支えていたのが「久留米絨」と「たび」の2大地場産業です。明治後期に工場生産となった久留米絨は、日露戦争の開戦とともに織物業界が不況に見舞われるなか、順調に生産を伸ばしていきました。また、たび製造においても「つちやたび(現・株式会社ムーンスター)」と「しまやたび(現・株式会社アサヒコーポレーション)」の2つのたび製造会社が互いにしのぎを削っていました。大正9年(1920)には久留米絨の生産額を、たびの生産額が上回るまでも勢いを増していきました。



久留米絨工場(写真提供・松野重行氏)



つちやたび

国鉄につづいて私鉄も開通 久留米が筑後の中心都市に。

大正時代になると交通網が拡張されていきます。大正13年(1924)には、久留米～福岡間に私鉄九州鉄道(現・西日本鉄道株式会社)が開通し、久留米地方の交通に一大変革をもたらしました。また同じ頃、市営ガスの供給開始、市営住宅の建設など都市基盤の整備が着々と進められていきました。



開通もない私鉄九州鉄道久留米駅

絨のまちからゴムのまちへ。

第一次世界大戦後、ゴム靴生産などのゴム産業を中心に久留米市の工業は進展しました。絨の生産が伸び悩むなか、昭和6年(1931)には、ブリヂストンタイヤ株式会社(現・株式会社ブリヂストン)が創立され、久留米は絨のまちからゴムのまちへと変容していきました。



国産自動車タイヤ第1号完成

空襲で市街地の7割を焼失

昭和16年(1941)、太平洋戦争へ突入。国民全体がいやおうなく戦時体制の中に組み込まれていきました。そして昭和20年(1945)8月11日、久留米市は米軍機による空襲を受け、市街地の70%を焼失。被災状況は死者212名、焼失戸数4,506戸にまで及びました。



戦災を受けた都心部(写真提供・坂田正三氏)

のあゆみ

History of 120 years of
Kurume City

焼け野原からの復興、始まる。公選初の久留米市長も誕生

第二次世界大戦により廃墟となった久留米市。しかし、市民の献身的な活動に支えられ、復興は着々と進んでいきます。戦災都市復興事業により道路整備や公園、緑地の造成など古い城下町から近代的な都市へ生まれ変わる基盤を築き上げました。

そんな戦後復興のさなかの昭和21年(1946)、日本国憲法が公布。選挙法も改正され、20歳以上の男女全ての人に選挙権が与えられることになりました。そして、昭和22年(1947)の戦後初の地方選挙では、公選による初の久留米市長に岡幸三郎が当選。岡市長は戦後の困難な市政を担当し、戦後初の町村合併を実現するなど、久留米市の発展に尽力しました。



公選初の久留米市長
岡幸三郎



戦後の旭屋デパート

昭和28年、未曾有の 大水害が久留米を襲う。

筑後川流域最大の都市である久留米市は、過去に幾度も大洪水の被害を受けてきました。なかでも、最も大きな被害を出したのが、昭和28年(1953)6月の大洪水です。記録的な豪雨により、堤防が決壊。久留米市における被災者は、47,885人、被災家屋は9,857戸にもものぼりました。



久留米大学から見た旭町住宅と護山城跡

高架完成で活気づく 西鉄久留米駅前

昭和44年(1969)、西鉄天神大牟田線久留米駅を中心におよそ1.5kmの高架線が完成しました。高架化されたホームの下には久留米名店街がオープンし、周辺には大型店も次々に進出。これを機に西鉄久留米駅が商業の拠点へと生まれ変わりました。



建設に入った天神町の米城ビル

久留米市、生誕120周年 中核都市への飛躍を誓う。

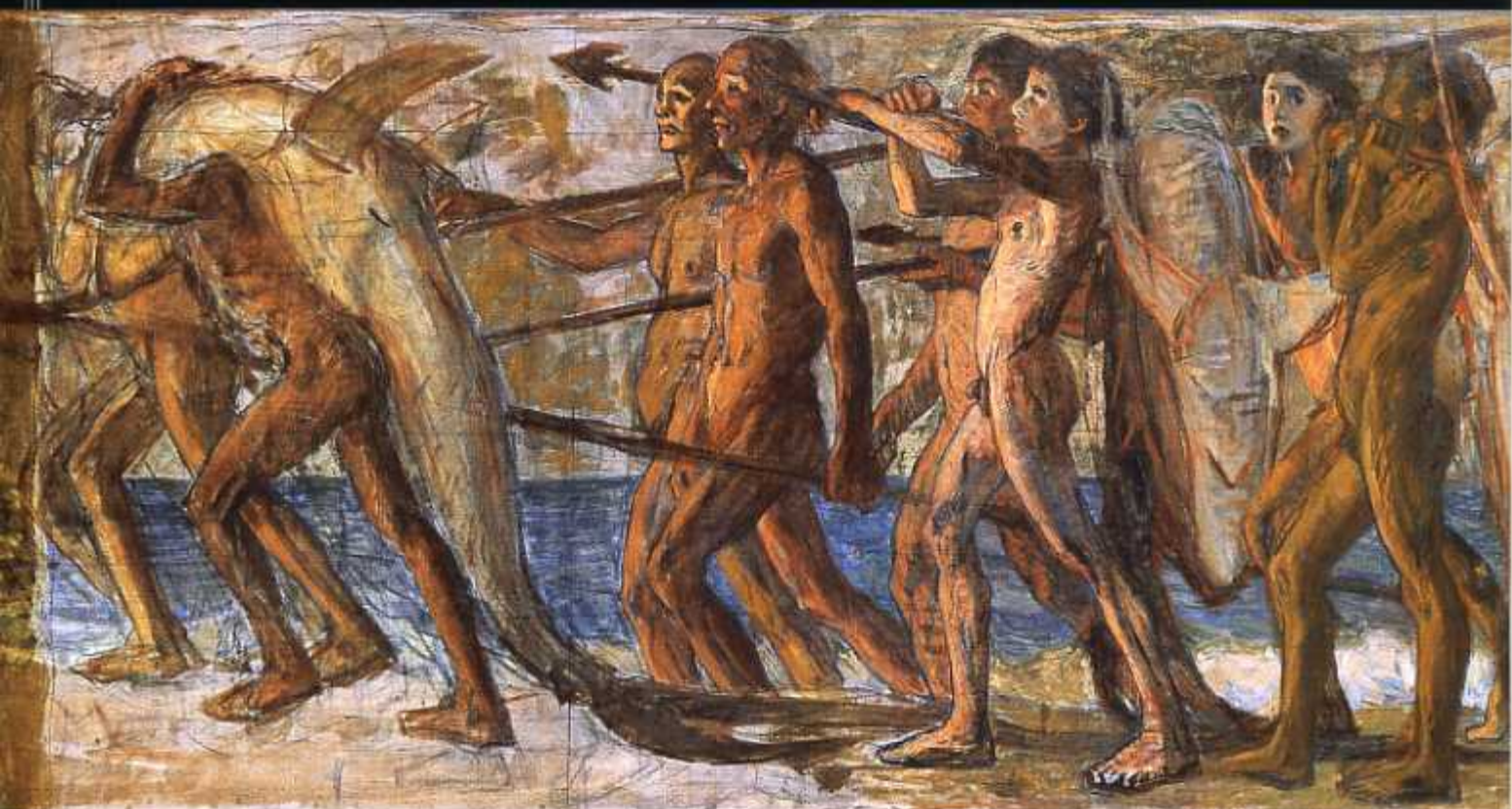
「昭和」から「平成」へと年号が変わった平成元年(1989)4月1日、久留米市は市政誕生100周年を迎えました。これを記念し、運動広場や芝生広場、多目的広場のある「久留米百年公園」がつけられました。公園からは久留米市を雄大に流れる筑後川や緑豊かな耳納連山を眺めることができ、憩いの場として多くの市民に利用されています。平成20年(2008)には中核都市へ移行。さらに、平成21年(2009)に市制施行120周年を迎えました。福岡県南地域の名実ともに備わった「個性・魅力・活力ある中核都市」の実現を目指しています。



中核市移行式

2005年、1市4町が合併。 新久留米市、誕生

平成17年(2005)2月5日、田主丸町、北野町、城島町、三瀬町との合併により誕生した新久留米市。人口は30万人を超え、面積も約230km²へと大きく拡大し、農・商・工バランスのとれた魅力あふれる都市になりました。久留米市出身の藤井フミヤさん作曲による新久留米市の歌も完成しました。



浪漫の画家

青木繁



明治浪漫主義を代表する洋画家・青木繁は、明治15年(1882)、久留米市荏島町で生まれました。少年時代から絵画の才能に長けていた青木は、17歳の時、画家を志して久留米から単身上京。小山正太郎の主宰する画塾、不同舎に入門しました。翌年の明治33年(1900)には、東京美術学校の西洋画科に入学し、黒田清輝らの指導を受けます。そして、明治36年(1903)、「古事記」を題材とした「黄泉比良坂」(よもつひらさか)他の作品で、第8回白馬会展の白馬賞を受賞。画家として華々しいデビューを飾りました。

明治37年(1904)、東京美術学校を卒業した青木は、その夏、恋人や友人たちと訪れた千葉県布良海岸にて「海の幸」(重要文化財)を制作。大海原を背景に力強い漁師たちの姿を浪漫的色彩たっぷりに描き上げました。そして、この作品は、第9回白馬会展に出品されるや、詩人の蒲原有明をはじめ象徴派や浪漫主義の文学者から賞賛され、青木は一躍時の人となりました。翌明治38年には、「古事記」上巻の綿津見の宮の物語を題材に「わたつみのいるこの宮」(重要文化財)を制作し、東京勸業博覧会に出品。三等賞を受賞しますが、青木にとっては不本意な結果であり、失意のうちに久留米に戻ります。やがて放浪の生活に入り、中央画壇に復帰することなく、28歳の若さで短い生涯を終えました。

芸術文化の発信地 石橋美術館

石橋美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎が、「世の人々の楽しみと幸福の為に」という理念のもと、郷土である久留米市に石橋文化センターと共に寄贈したものです。氏のコレクションを中心に、青木繁、坂本繁二郎、古賀春江といったふるさと久留米の画家をはじめ、明治浪漫主義的な作風の絵画を多く残し石橋氏とも親交の深かった藤島武二の作品など、日本の近代絵画が数多く展示されています。別館では国の重要文化財に指定されている雪舟の「四季山水図」のほか、日本・東洋の書画や陶磁器類など、国宝や重要文化財級の美術品を展示。芸術文化の拠点として、多くの人が集い、楽しむ場として親しまれています。



(左)藤島武二「天平の面影」
(右)雪舟「四季山水図」のうち秋幅

